

メキシコ、ミチョアカン州の一村落における幼子イエス像の「世話」

川本直美（京都大学大学院）

キーワード：カトリック聖像、ケア（世話）、宗教におけるモノ

国民の8割を超える人口がカトリック教徒であるとされるメキシコでは、自治体ごとにカトリックの守護聖人が定められ、多くの聖像が教会堂や小教会に安置されている。そして年間を通して各地でイエス・キリスト、聖母マリアや聖人を祝う祭礼が開催されている。個人用には、街中で聖像、十字架、宗教画、写真などがあちこちで販売されている。教義の上でカトリックは偶像崇拜を禁止しているが、現実には宗教的なモノがいたるところで溢れている。

従来の中米のカトリック祭礼や巡礼に関する研究においては、モノである聖像とは単になにかしらの意味を象徴するものであった。そこでは聖像そのものは図像学的な研究対象であっても、信者との関係で十分な研究がなされてきたとは言えない。それに対し本発表では、教会と信者の自宅において信者がいかに聖像と関わっているのかということに着目する。

本発表はメキシコ、ミチョアカン州の一村落で実施した計22ヶ月の現地調査に基づいている。村には、およそ100年前から当地にいる幼子イエスの像がある。この像は、信者である住民たちの自宅を一年ごとに渡り歩いていて、そこでは滞在先の家族が中心となって毎年祭礼の開催や像の世話をしている。具体的な像の世話には、幼子イエスの像の洋服を日常的に着替えさせたり、像を「寝かしつけ」たりといったことが挙げられる。本発表では、信者の自宅で行われるこれらの世話において人と像がどのような振る舞いをしているのか、そしていかに関わっているのかということについて分析をしていく。そこから、神または聖人と信者の関係を形成する上で重要となるのは奇跡体験や祈りだけでなく、神への奉仕としての「世話」の実践もあるということを示す。

【主要参考文献】

Gell, Alfredo 1998 *Art and Agency: An Anthropological Theory*, Clarendon Press

Pinney, Christopher 2001 Piercing the Skin of the Idol. In *Beyond Aesthetics: Art and the Technologies of Enchantment*, Christopher Pinney and Nicholas Thomas eds., pp. 157-179, Oxford: Berg.